

東大耳鼻咽喉科教室に音声言語外来および音声 言語研究室が創設されたころのこと

堀 田 琴 次*

今回、東京大学医学部に、音声言語医学研究施設が、正規の研究機関として、設置せられたのは、斯学発展のため、まことに慶賀にたえないところである。関係諸氏の努力は、じつに大変なものであったとおもう。

東京大学医学部耳鼻咽喉科学教室に、その構成要素の一部分として、音声言語外来および音声言語研究室が設けられたのは、昭和6年4月初旬であった。約30数年以前のことである。

音声言語が、人間の社会生活上、すこぶる重要な機能であり、医学の対象としても、きわめて重大な役目をはたさなければならないのは、あえてここに論ずる必要のない事実であろう。しかも、特にわが国では、一般医学からはもちろん、専門領域の耳鼻咽喉科からも、それについて関知されるところ、すこぶる少なしという実状である。

この状態に、つよく不満を感じたのは、東京大学医学部耳鼻咽喉科学教室の開祖、故岡田和一郎教授であった。氏はその当時、日本にただ一つしかない耳鼻咽喉科学の大学講座に、音声言語研究室の併置を、つよく意図したのだ。外科学出身の氏が、始めて耳鼻咽喉科学を習得したのはドイツである。ベルリン大学医学部における耳鼻咽喉科学教室のありかたを、ふかく理念としたものであろう。

しかし、耳鼻咽喉科学教室の創設時代において、それを、すぐ達成しようというのは、ムリであった。時期尚早というのであろう。しかも、その困難は、時を経るにしたがって、ますます増強するばかり。それを、ついに何とか打開したのは、大正の末期、東京大学医学部長となった内科学の入沢達吉教授なのである。岡田教授と新医学部長とは同窓同学、いわゆる竹馬の友であったのだ。岡田教授は、新医学部長の鼓舞によって、音声言語外来および音声言語研究室併置の初志をふたたび、ふるいおこされたのであろう。

その実行手段として両氏はまず、当時の東京音楽学校—現在の東京芸術大学音楽部—の校長、湯原元一氏を訪問したのである。そして、音声言語に関する科学的研究の必要を力説し、その主任研究員の推薦かたを委嘱した。条件としては、本校の卒業生中、更に東大医学部医学科に入学しうるもの、そして将来は、東大医学部耳鼻咽喉科学教室に入局し、生活の中心を、音声言語の研究におくものというのであった。湯原校長はもともと、医学修業の目的をもって、東大予備門にまなび、入沢、岡田の両氏とは、その当時の同級生としてすこぶる懇意なあいだであったらしい。

* 国立聴力言語障害センター所長・前東京大学教授・前東京芸術大学教授

両教授の希望は容易に諒解され、その場でただちに推薦されたのが、不肖わたくしなのである。以下、私事にわたるので、筆はおのずから、遅々たらざるを得ないのだが、その当時わたくしは東大医学部薬学科——そのころ薬学科は医学部に包含されていた——を卒業。本職のかたわら、東京音楽学校管絃楽団——その当時は本邦唯一のもの——の正メンバーとして、週二回、上野に通勤していたのだ。幼少時から同校のバイオリン選科に籍をおき、一高の末期から、その管絃楽団の正員として編入され、東大在学中はもちろん、耳鼻咽喉科教室入局後も、それはずっとつづけていたのである。約 30 年以上、安藤、幸田両女史等々の、驥尾に付随していたことになるのだが、自分ながら、ふしぎな経路をたどったものとおもう。

話は少しあともどりするが、入沢医学部長、岡田教授、湯原校長の合議によってわたくしは、まもなく東大医学部医学科に再入学。卒業後ただちに耳鼻咽喉科学教室入局。岡田教授の副手として、はじめ聴覚の研究に従事し、日本人の音感覚の特殊性についてまなび、絶対音感所持者に関する仕事をまとめ、昭和の初期から、もっぱら音声言語の実験に、力をそそいだものである。

当時の協同研究者は、故北川信太郎、白岩俊雄、故野村信太郎、小川常二、切替一郎、堀口申作、藤田馨一、古山重夫、法水正文等の諸氏である。

今かんがえても、当時のこの団体のチームワークは、じつに明るく、活発なものであった。あとで聞くとところによると、学内の他の研究団体からも少なからず、羨望の目をもって見られていたらしい。若き良き日のおもいでだ。生きているかぎり大切にしたいものとおもう。その業績の集大成は、昭和 13 年の春、千葉大学における第 43 回日本耳鼻咽喉学会総会の宿題報告として講演した。題は「発声機構及び語音調節について」というのである。内容は、呼吸作用、声帯機構、共鳴現象、語音調節の四部にわかれ、人間の発声現象のすべてについて、系統的に検索しているのだ。適用した機器は、X 線カイモグラフ、ストロボ影写装置、オスシログラフ、高速度活動写真器等であって、報告は全部、動画および映像によって説明されている。

科学の進歩は、寸時も休息しないのだ。東大医学部音声言語医学研究施設の将来には、必ず期して待つべきものがあるとおもう。ここではただ、その前身、東大医学部耳鼻咽喉科音声言語外来および音声言語研究室の歴史について、おもい出すまゝを述べ、あえて祝辞にかえるゆえんである。